

『心の貧し者』(マタイ5:1~3)

聖書箇所 マタイ5:1~3

5:1 その群衆を見て、イエスは山に登られた。そして腰を下ろされると、みもとに弟子たちが来た。

5:2 そこでイエスは口を開き、彼らに教え始められた。

5:3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。

説教要旨

2026年年間聖句はマタイ5章3節、年間主題は「救いを生きる教会」です。クリスチャンの在り方、生き方を知り、そう在らせ、そう生きさせていたきたいと願います。一年をかけて「山上の説教」の御言葉に聴いていきます。山上の説教をなす背景がまずv1とv2で語られています。ここには「群衆」と「弟子」が登場しています。主イエスは神の国をもたらす働きを開始され(4:17)、まず「弟子」を召されました。続いて会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中の病や悪から来る傷みを癒やされました。主イエスの評判は広まり、大勢の「群衆」が主イエスの回りに集まってきました。主イエスは「その群衆を見(v1)」られ、山に登られ腰を下ろされると、主イエスのもとに「弟子たちが来て(v1)」、その弟子たちに語られたのです。(v2)旧約時代、モーセがシナイ山でエジプトを脱出したイスラエルの民に律法を与えられたように、主イエスは山上で弟子たちに教えられたのです。すでに主イエスについていき、天の御国の中に招かれ歩み出した弟子たちに向かって、言わば教会、クリスチャンに向かって語られた教え、それが「山上の説教」です。聖霊が内に住む者たち、聖霊に拠り頼み助けをいただく者たちへの教えです。そしてその弟子たちの周りには群衆がいました。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです(v3)」山上の説教の冒頭の言葉ですが、これがクリスチャンの在り方、生き方の“本質”です。「幸いだ」。どんなクリスチャン、教会は「幸い」なのでしょう。か。「心の貧しい者たち」「心(v3)」とは「 pneuma」との言葉で「私

という存在そのもの」、特に「神との関係」「霊」を表しています。「貧しい者(v3)」とは、「自分で生きられず、他人の助けに頼っている者」です。自分に余裕があって、その中で神に信頼する者ではありません。神に拠りすがらなければ立ち得ず、神の助けに生かされている者です。日々の歩みの中で、特に苦しみや失敗を通して神に頼らなければ私の歩みはなされていかなない者だと私の存在の中心が打ち砕かれている者です。私たちは穏やかな歩みで、ある程度ゆとりがあって、人間関係の悩みもない、それが「幸いだ」と思う。神の祝福だと思う。でも、主イエスは、そうではなく、ぎりぎり、恐れがあって、神に拠りすがり助けを切に求めて歩む者が「幸いだ」と仰せられるのです。

なぜでしょうか?「天の御国はその人たちのものだからです(v3)」砕かれて神に拠りすがる者こそ、そこに神の救いの支配がその人のものとなり、現わされていくからです。聖霊の実が現わされていくからです。そして、弟子たちの周りには群衆がいました。クリスチャンは輝いていなければ、確かにそうです。でも、それはその人自身が強いことでも輝いていることでもありません。その輝きは砕かれて神に拠りすがる歩みに現わされていく神の素晴らしさの輝きです。クリスチャンは愛の歩みをなしていきます。確かにそうです。でも、それは私たち自身の内に愛があるのでありません。愛がないので神に助けを求め、神の愛の素晴らしさが現わされるのです。なぜ苦しみが過ぎ去らないのか。なぜ愛において課題があり続けるのか。そこには神の深いご計画があるのでしょうか。私たちの中心(霊)が神に砕かれ、神に助けを求める者たちとなり、神の救いに生かされていき、その私たちにおいて神の救いが隣人に現わされていくためです。

「救いを生きる教会」この年も神は私たちが愛し、ともにおられ、私たちが御手の中で導かれていきます。世の苦難、人間関係の悩みの中で神に拠りすがり、聖霊の助けを求め、神の救いの祝福に与り、神の救いの祝福を現わしていく教会、一人ひとりとして導かれていきたいと思います。「心の貧しい者は幸い(v3)」主の深い御思いを覚えたいと願います。